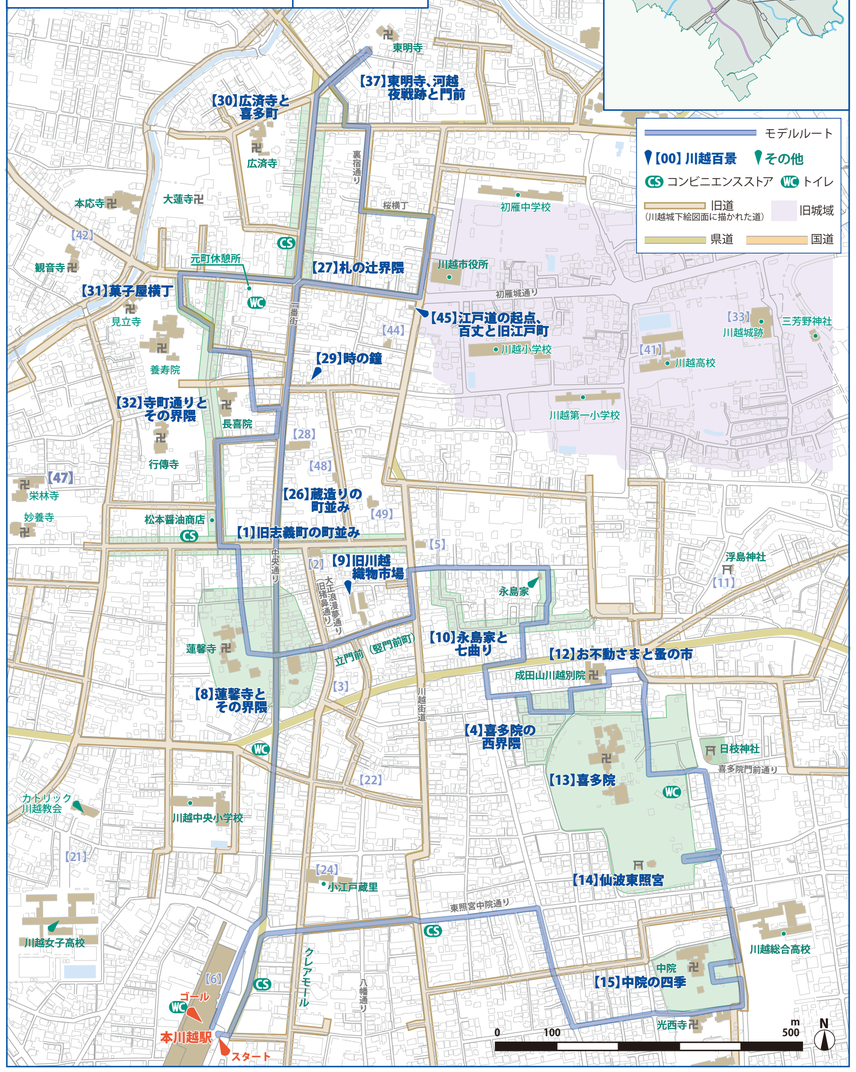
⑩喜多院界隈と四門前めぐり｜約８km

本川越駅→【15】→【13】【14】【12】【4】→【10】→【9】→【8】→【32】【31】→【27】→【30】→【37】→【45】→【29】【26】→本川越駅

徒歩約２時間
見学・休憩等を含まず



【8】蓮馨寺とその界隈

蓮馨寺（浄土宗）は孤峰山宝池院と号します。天文 18 年（1549）、後北条氏の川越城代大道寺政繁の母・蓮馨尼によって創建され、政繁の甥・感誉上人を開山としました。江戸時代には、浄土宗の関東十八檀林の一つとして栄えました。感誉上人の孫弟子であり、庶民に親しまれた呑龍上人を祀る呑龍堂があり、毎月８日は縁日「呑龍デー」として賑わいます。呑龍会館で着付けを受け付ける「着物の日」も好評です。

【1】旧志義町の町並み

志義町は十ヵ町の一つで刀鍛冶鴨氏が開いたといいます。明治時代後期には、川越で最も背の高い蔵造りである市指定文化財原田家（足立要）をはじめ仲町観光案内所の蔵造りなど十数軒の米穀問屋が立ち並んでいました。仲町交差点をはさんだ北側一角は、伝統的建造物群保存地区になっており、川越でも有数の蔵造りの町並みを形成しています。

【32】寺町通りとその界隈

四門前のうち養寿院と行伝寺の２か寺を南北に結び、さらに長喜院の境内も接する寺町通り。石畳調の通りでは養寿院・行伝寺の広い境内に沿って伸びやかな雰囲気が楽しめる一方、それぞれの門前に残された町家の町並みは、どこか懐かしさを感じさせています。南の入口には、もろみのかおり漂う醤油の醸造蔵があります。

【31】菓子屋横丁

菓子屋横丁に菓子屋ができたのは明治のはじめで、昭和初期の最盛期には 70 余軒が軒を連ねる一大菓子製造・卸売りの町に発展。戦後は次第に衰退しましたが、小売に転換し、さらに、石畳舗装などの景観整備が行われ、テーマパークのように昭和の懐かしい風情を楽しめる横丁となりました。舗装に埋め込まれたガラスブロックは、飴玉をイメージしています。

【30】広済寺と喜多町

「どっこい喜多町広済寺」。喜多町から志多町にかけては、以前はかなりの急坂で、手車や馬車の難所で、「ソラきた、ホイきた」と励ましあって登ったのだとか。曹洞宗青鷹山慈眼院と号し、北条氏の川越城代大道寺政繁の菩提寺として建立されました。境内には、咳や痰に効くという「咳地蔵尊（おしわぶきさま）」、歯痛や虫歯に霊験ありという「無腮地蔵尊（あごなしじぞうさま）」の２体の地蔵が安置されています。

【37】東明寺、河越夜戦跡と門前

時宗稲荷山称名院と号する東明寺は、天文 16 年（1547）の河越夜戦跡として知られます。かつて惣門は現在の喜多町の中ほどにあり、喜多町は「東明寺門前町」と呼ばれました。本尊は虚空蔵菩薩ですが、「赤白二匹の狐が仏像をくわえてきて本堂に置いていった」という伝説があります。

【27】札の辻界隈

札の辻は、明治初期まで藩や役所の制札を立てた十字路で、川越城下唯一の四つ角でした。「四方へ之行程是よりして斗す、江都（江戸）の日本橋の如し」と、繁華で交通の要でした。

【26】蔵造りの町並み

江戸時代から続く川越の町割は、川越城と城下、喜多院や東照宮まででも焼失した寛永 15 年（1638）の大火の復興として、松平信綱により生み出されました。明治 26 年（1893）の大火の復興には防火性にすぐれた蔵造りが採用され、大火後十数年の間に 100 棟を超える蔵造りが出現しました。ほかの店舗でも延焼の恐れのある北側壁面を漆喰で塗り込めた土壁としたり、袖壁をつけたりと、防火対策を施した町家が軒を揃えました。

大正時代には洋風建築や看板建築も登場します。川越は関東大震災や戦災の影響をあまり受けなかったこともあり、江戸時代の都市構造のうえに明治から昭和にかけての各時代の特色ある建築を眺めることができます。

【29】時の鐘

一日４回、時を告げる川越のシンボル。寛永期に川越藩主だった酒井忠勝は時間を正確に守る人で、江戸城では忠勝公の登城を時計代わりにしていたというエピソードがあるほど。その忠勝公が城内に太鼓櫓をつくり、時刻や非常を知らせました。鐘撞き堂は大火の度に焼失しましたが、その都度再建されました。現在の時の鐘は明治 26 年（1893）の大火の後に再建されたものです。

【45】江戸道の起点、百丈と旧江戸町

かつての江戸町は、江戸に向かう川越街道の起点。百丈はもとは釣具店で、現在は手打ちそば屋です。木造の建物を銅板で葺きあげた看板建築で、窓枠の意匠が各階で異なるなど、職人の技が効いています。

【10】永島家と七曲り

七曲りは明治４年（1767）の松平大和守家の入封により、新たにできた道です。この辺りは北久保町、南久保町、竪久保町（現三久保町）と呼ばれた武家地としての名を残す一角で、永島家住宅は枳殻（からたち）の生垣と本来は草葺が特徴の武家住宅です。かつて川越氷川祭では藩主による上覧も行われたように、武家地においても各町が用意した舞踊やなどの様々な芸が数か所の芸場で披露されました。永島家の向いの家もその一つとして記録に残ります。

【9】旧川越織物市場

川越織物市場は、外勢に押され気味だった川越の織物商人が勢力挽回を期して設置したもので、当時の商業会議所の一大プロジェクトでした。市場閉鎖後は集合住宅として利用されてきたため、解体を免れ、明治 43 年（1910）築の町家風長屋が中庭をはさみ、2 棟残されています。明治期の川越の繁栄を支えた織物産業の盛衰を伝える近代化遺産として貴重なものです。

【13】喜多院

喜多院は川越の歴史文化のシンボルとして、多くの参詣者で一年中賑わっています。奈良時代の仙芳仙人による縁起も伝わりますが、平安時代の天長７年（830）の慈覚大師円仁によって無量寿寺として創建されました。慶長４年（1599）に天海が住職となってから寺勢を誇るようになり、寛永の大火の後、家光の命により江戸城から客殿・書院・庫裏を譲り受けます。重要文化財に指定されている慈眼堂、鐘楼門、山門、また、県指定文化財に指定されている慈恵堂、多宝塔、番所など文化財が豊富です。また、表情豊かで変化に富む五百羅漢も有名で、訪れる人を楽しませてくれています。

【14】仙波東照宮

仙波東照宮は、日光・久能山とともに三大東照宮とされています。日光山へ移葬される家康の遺骸は、元和３年（1617）、久能山を出て 10 日後に喜多院の大堂（薬師堂、のちの東照宮本地堂）に到着、天海は４日間霊柩を安置し、導師となって連日大法要を営みました。寛永 10 年（1633）１月に東照宮造営に着手し、12 月には後水尾天皇自筆「東照大権現」の直額を下賜されます。しかし 5 年後に城下の大火にまきこまれて焼失。家光が願主となって再建にあたり、かつての中院跡に高さ５間、縦 21 間、横 11 間の築山とともに、本殿、唐門、幣殿・拝殿、石鳥居、随身門と一連の社殿建築が造営されました。

【4】喜多院の西界隈

このエリアはかつての花柳界で、現在も大正から昭和にかけての建築物が残り、当時の繁栄を伝えています。「てんぬま」（大正 11 年築）は起り（むくり）の付いた入母屋屋根が特徴的な妓楼。洋食店「栄」（大正 11 年築）は 2 階の手摺に色ガラスがあしらわれたハイカラな妓楼です。「市村旅館」（昭和初期築）は、重厚な 2 階の起り屋根と鉄板葺きで軽く見せる 1 階。重厚感と軽快感とを併せ持つ妓楼建築です。

【15】中院の四季

天台宗別格本山星野山中院は、平安初期の天長７年（830）創建の古刹で、戦火や大火を経て再興、再建され現在に至ります。市指定史跡となっている境内は、閑静で手入れが行き届き、訪れる人に季節の喜びを感じさせてくれます。「武蔵三芳野名勝図会」では「星野一山、桜おほしと云えども、・・・暮春には、千条万枝艶花芬々として、賽の貴賤、樹下に憩ふ」と、桜を愛でる様子を伝えています。お盆の時期の行事「法灯花」では、赤い花を模した蝋燭が灯され、普段非公開の奥庭も散策できます。このほか、初夏は赤いつつじ、夏は沙羅双樹の白い花、冬はいちょうの黄葉と、四季折々に参詣者の目を楽しませてくれます。

【12】お不動さまと蚤の市

「川越のお不動さま」と親しまれる成田山川越別院本行院は、嘉永３年（1850）の創建です。不動明王の縁日である毎月 28 日には古着や骨董品などの露店が並ぶ蚤の市が立ち、たいへんな賑わいを見せます。門前の「市野屋豆腐店」は明治 43 年（1910）の創業時の町家で、隣接する看板建築の「市野川家」とともに都市景観重要建築物に指定されています。

マップ範囲内のそのほかの百景

【２】川越商工会議所【３】大正浪漫夢通り【５】松江町の教会【６】西武新宿線特急小江戸号【11】浮島神社【21】川越女子高校の桜並木と六軒町のカトリック川越教会【22】出世稲荷神社の大イチョウ【24】小江戸蔵里　【28】旧八十五銀行本店本館（埼玉りそな銀行川越支店）【33】川越城跡【41】川越高校のくすのき【42】石原のささら獅子舞、観音寺と本応寺【44】川越の昭和モダン太陽軒【47】栄林寺のしだれ桜【48】中成堂歯科医院【49】旧山崎家別邸

※栄林寺のしだれ桜は平成27年に自然倒木したため、現在は見ることができません。